

主日礼拝9月4日(日)

題 「キリストにある苦しみの意味」

テキスト：ペトロの手紙Ⅰ 4章2～19節

皆さん、おはようございます。

人間にとってこの世を生きることは楽しいこともあります。ご存知のように様々な痛みもあります。自分自身のこと、家族のこと、仕事のこと、地域や属しているグループや団体、社会のことなどなど。

今日の聖書の箇所には、

「キリスト者として痛みを受ける」ことの意味について記されています。ペトロはキリスト者たちに「苦難をも喜ぶように」と励ましています。

12:愛する人たち、あなたがたを試みるために身にふりかかる火のような試練を、何か思いがけないことが生じたかのように、驚き怪しんではなりません。

「火のような試練」とは、ペトロが手紙を出した地域のキリスト者の受けていた痛み、キリスト者ということの故の地域からの迫害もあったようです。また旧約聖書の箴言という書物27章21節には「銀にはるつば、金には炉、人は称賛によって試される。」という言葉があります。

77年前の先の日本の戦時中にも、キリスト者は、外国から来た宗教を信じている、敵国の宗教を信じていると言われて辛い思いをしたキリスト者もいたようです。教会に通っている人に対して、「アーメン・ソーメン」と揶揄することばもあったようです。洲本や淡路島ではどうだったのでしょうか？戦時中ではなくても現代でも状況によっては起こり得ることだと思われまます。「火のような試練を、何か思いがけないことが生じたかのように、驚き怪しんではなりません。」そのような心備えをしておくようにとの勧めだと思ひます。

13節には、

「13:むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど喜びなさい。」

とあります。伝道者パウロが捕らわれの身となった獄中から書いたフィリピの信徒への手紙は「喜びの書」とも言われまますが、4章4節には「主において喜びなさい。重ねて言ひます。喜びなさい。」と繰り返されています。

ペトロは「喜びなさい。」。キリストの苦しみにあずかればあずかるほど喜びなさい、と言ひます。と言われても「痛みと喜び」を理解するのは、「なかなか難しいな〜。」と正直思ひうのです。

なぜなら苦しむことと喜ぶことは正反対のこと、「喜びだけだったらいのに」と

思うのです。でも、今までの人生の歩みを振り返ってみる時、思い返してみる時、苦しみを知らなければ、本当の喜びを理解できない、分からなかったのではないかとも思います。喜べる状況の中にずっといると喜べることもあたりまえのように感じてしまいやすいと思うのです。「苦しみと喜び」は、人生を包むサンドイッチ」のようだと思うのです。

瞬きの詩人と言われる。水野源三さんの詩に「苦しまなかつたら」という詩があります。

「もしも私が苦しまなかつたら 神様の愛を知らなかった。もしも多くの兄弟姉妹が苦しまなかつたら 神様の愛は伝えられなかった もしも主なるイエス様が苦しまなかつたら神様の愛はあらわれなかった」 このような詩です。

「14:あなたがたはキリストの名のために非難されるなら、幸いです。栄光の霊、すなわち神の霊が、あなたがたの上にとどまってくくださるからです。共にいてくださるからです。」

キリストの名のために非難されるなら、その時は幸いなんだと言われます。すなわち神さまの栄光の霊、すなわち神の愛の霊がわたしたちの上にとどまってくくださるのだと。

使徒言行録に記された使徒ステパノのことを思い出します。

そこにはイエスを信じて殉教したステパノの最後が記されています。

使徒言行録7章5節から (P227)・・・

ただしキリスト者は、次のようなことで苦しみにあってはいけないとも忠告されています。私たちにも当てはまることではないでしょうか。

15:あなたがたのうちだれも、人殺し、泥棒、悪者、あるいは、他人に

干渉する者として、苦しみを受けることがないようにしなさい。

ここを呼んでいて「他人に干渉する者として」という言葉に心が止まりました。この言葉は「おせっかい」でという風にも理解できるようです。そうすると他人ごとではないと思えてきたのです。自分のこととして受けとめる時、実は人のことを思っているようで他人の内心に土足で踏み込むことがあるのではないだろうかと思わされるからです。「おせっかい」から人間関係にヒビが入り、遂には関係破壊に至ることもあります。

16:しかし、キリスト者として苦しみを受けるのなら、決して恥じてはなりません。むしろ、キリスト者の名で呼ばれることで、神をあがめなさい。「キリスト者」という言葉は、もともとあだ名だったと言われます。「キリスト

につく者たち」と周りの人たちがさげすんで言っていたのです。

キリスト者であることを恥じないようにということです。初代の使徒たちは「イエスの名のために辱めをうけるほどの者にされたことを喜んだ。」という記録が使徒言行録にはあります。

ところで、ここから、突然と思えるような言葉が出て来ています。

17:今こそ、神の家から裁きが始まる時です。「神の家から裁きが始まります。」という意味だと言われます。何かドキッとする言葉です。

これは、どういう意味でしょうか？ どう理解したらよいのでしょうか？

キリスト者の交わり、教会の中から神の裁きが始まる。「裁き」とは、「分ける」という意味があると昔、聞いたことがあります。国と国の境を分ける、良い物と悪い物を分ける。好き嫌いで分けることもあります。組織や社会や国家では、規則や法律で分けられます。

基準は正しいか、間違っているか、規則に違反しているかどうか。

歴史を振り返ると初代教会でも起こった問題です。

ユダヤ人のキリスト者と異邦人のキリスト者との分裂。今までの習慣の違いや、異邦人のやもめたちが軽んじられていたことに対する不満が出て来たのです。

更に歴史をたどると、キリスト教の教え、教理を巡っての教会の分裂。

カトリックとプロテスタントの分裂。教派の問題などなどあります。

今日まで世界にも様々なキリスト教の教派が歴史的に生まれてきました。長老派、組合派、メソジスト、バプテスト派、現代に入り様々な福音派などなど。みな根っこはイエス・キリストなのですが、人間の考えによって分かれて来たのです。

現在、わたしたちが属している日本キリスト教団の中にも、聖餐を巡っての意見の違いがあります。洗礼を受けてない人を、聖餐式に与らせたということで、40年間牧師を続けていた牧師が免許をはく奪されるという事が10年以上前に起こったのです。牧師が仕えていた教会の役員会は、「どうしても聖餐式に与りたい人は今は洗礼を受けてなくても洗礼にあずかって良いのではないか。」と長年の教会内の話し合いでそう決めたのです。しかし、教団の執行部は洗礼を受けいてない人に聖餐を受けさせてはいけないと、遂に牧師職をはく奪したのです。そして、現状は聖餐のあり方についての話し合いもしない、という状況なのです。聖餐はキリストにある群れにとってイエスの十字架の愛を覚える大切なものです。わたしは、この事を思うと心が痛むのです。いきなりともとれる「牧師の免許をはく奪する」ということに対して、主イエスの愛にならって、祈りを持って対話し、他に解決方法は模索できなかったのか、できな

いのかと今でも思っているのです。

ルターの宗教改革によって、それまでの聖餐式の方法も変わったことは事実なのです。

この先、この問題も、どのようになっていくのかは誰も分からないのです。人間の考え方の違いもあれば、歴史的な伝統へのこだわりもあるかもしれません。しかし、これは神さまから突き付けられたチャレンジの時でもあるのかもしれません。良い悪いは別にして、悩みながらも希望を持って祈りつつ担っていかなければならない課題だと思うのです。ただ、歴史を振り返る時、神の働きと業は分裂の中でも人知を超えて起こって行くことだと思い、信じるのです。

何より信仰者として大切なことは、

たとえ苦しみや試練は襲って来ても、弱ってもへこたれず、たとえ倒れても主にすがり立ち上がって歩く、生きるということだと思います。わたしたちはどのような状況にあっても、置かれた場所で、神さまが導いてくださることを信頼して、神さまに思い煩いをすべて任せて、善い行い、人を生かす働きを心がけて生きて行けばそれで良いのだと思うのです。

主イエスの名を呼ぶ者たちを神さまは決して見捨てず導いてくださるのです。

主の平安を祈ります。